

9 寛政七年刊『花供養』

底本 白鹿

参考 一茶全集

花供養

(表紙・題簽)

(表紙見返し)

花相似たる花供養を意旨同じからざる句を

もて、蕉翁の霊前に捧ぐ。もとこれ闌更大人、

路に杖を停めてより、無洩遺冊子を編る

事、重霜十余年、鳥に魚に便りをもと

めて諸風子閑雅の信を顕し、年々歳々

此挙に預る句々倍に倍せり。年既花曇の

みやびを手向給ひしを句の卷頭にすゑて、

けふや席上の俳諧興に入る事誠に気楼に

登るがごとく、猶後年は又いづれの風流客

あらんと、其会其日を待てる人／＼と共に
此事を約して、爰に筆をさし置のみ

平安 大来堂百池謹書

于時寛政乙卯三月

桜／＼我たつ杣の花曇

蜃州

山鳥啼て山ふかき春

闌更

裏関は牛も通らぬ永き日に

百哺

撰る豆を盆に轉がす

南峰

月の宿暮ぬうちより用意して

月峰

顔に蜻蛉の行当りたり

淇竹

露残る青物市の跡なれや

芦涯

竹の細工の暖簾洩レ居る

沙長

しのばする妹が後を隠しかね

蛇蟄

恋のすさびの酒あまき也

応美

とりかはす扇に旅の記を書て

平吞

むすび捨つる栗の落花

白黛

細／＼と煙の末に雨後の月

斗流

舟錢寄る橋本の秋

杜桂

遠近に綿打音のかまびすき

木貞

御法の松に馬繋ぎ置

不狷

都人のあはれがりつるすまの春

閑都美

霞の中に入日真向ふ

魯長

鶯の声もしどろに杜の中

五英

葎にからむ為有が軒

漢水

頼来し多年衣の垢つきぬ

俚尤

おもへば夢の夜を長居して

関叟

根羽もなき矢を受取し頃日は

百池

木がらし強き越の川音

土卵

雪搔のすみかは殊に侘敷て

一峰

つぶらといへるものに子の泣

百塘

ぼく／＼と砂踏路に草臥て

得終

薄月うつる合歡の下陰

志諺

いとなくあやしき神を祭来し

光暁

絶て名のなき瀧にうたれん

江蓼

雨曇日すがらものゝ腥き

桃李

いぶせき中に女斉

梅司

藤原の烏帽子の折目世に伝へ

米駒

高くもつみし恩賞の米

驢丹

人心坂もいとはず花に寄る

都雀

旦を清く鷺の曳声

其成

花に嵐守夜を八重に明しぬる

江州坊村

蓮車

散花を掃よせちらし散しけり

、水口

虎眼

御車の牛も草はむ桜かな

、

文之

のぼる人の少さく見えて桜山

、

貫志

花のやどりねられぬ足のほめき哉

、

一口

合掌の眼にたなびくや花の雲

、

清川

たはれつゝ花に起臥身となりぬ

、深川

梅児

恨なよ遅きは土地の山ざくら

、八幡

此得

我心なやめる雨のさくら哉

、太田

瑳雀

山陰やさくら一木に家ひとつ

、篠原

古音

散るや桜なしうち烏帽子斑なる

、堅田

千羅

鳥鳴かで山やゝ深しちる桜

、

古曲

夕霞花は朧の渡月橋

、平松女

志宇

蝶ぬれて花に重たき姿哉

、万木里

東嶺

花さくや野川流るゝ子供笛

、堅田

歌雄

散過し桜のもとのゆふべ哉

、

一之

老らくのむら食しけり花の本

、

籬邑

花にまた田楽焼かすかゝり人

、

素呈

明樽に活てもどるや山ざくら

、

吐雲

花の欲たへてまた寝やけふの雨

、守山

李明

月のさくらまだ落つかぬ鳥一羽

、坊村

當令

花になる頃やそゞろに旅ごゝろ

、上田

無徳

見残して花の嵐や奥の院

、辻村女

りき

薄雲のたな引空やかはざくら

、

春汀

一日は米の飯食て花見哉

、大塚

吾人

下戸一人世に拘りて花戻り

、岩根

桂石

山遠し女気のなき花の下

、古川

一静

枝折して桜にあゆむ深山哉

、酒人

里童

なりはてし身の幸や花の守り

、

重野

石かりも世の思ひ出や山ざくら

、立法師村

木鬼

山鳥を追出す犬やさくら狩

、大津

一兆

鋌打の乗物もありさくら狩

、武間

眉山

客去て一輪花の散にけり

、野田

文山

我庵や問はず語らず山桜

、長浜

桃岸

吹入し花の波間や浮御堂

、大津

井子

花に寝る腸くされ雨の中

、栗津

重厚

湖の水すみにけり遠ざくら

加州金沢

松菊

人の子をいだき上けり花の中

、

更々

おくふかく花曇けり二尊院

、

南峰

此上も幸もなし遅ざくら

加州

竜湫

飛ぶ鳥や花になれあふ東山

、金沢

對山

美しきもの手にふるゝ桜哉

、

素后

花鳥や返り見らるゝ人の情

、

車大

おもひ入桜が中の忘れ水

、金沢

一抄

暮るまで眼の煩惱や花の山

、柏野

凌風

うす雲のちら／＼晴て朝桜

方舟

月しづか桜のもとの人薫リ

本吉

左来

月明し花の麓の児ざくら

、宮腰

松風

遅ざくら咲や覚ゆる水の味

、

雅石

あら川や上は一瀬に花曇ル

、金沢

凌冬

夕暮や花の上ふく日枝おろし

、

子風

柴橋を過て桜の曇り哉

、

蘭吹

ひらかずにたゞ扇もつ花見哉

、

吾角

ひよ鳥の一群返る桜かな

、

蘭史

湖近きさくら淋敷詠けり

、

李下

鳩の声雀の声や花曇り

、

蒼虬

夜ざくらや暫眠る松の陰

能州黒島

珠卜

山かげや桜を洩るたゞき鉦

、

柳汀

雲結ぶ山に入りけり夕ざくら

、

都山

眉作る女ありけり軒の花

、

素玉

船寄る月の汀のさくら哉

、

文朝

散かゝる賤が膚や夕ざくら

、

馬涼

いさをしや彼岸日和に花七日

、

布遊

夜桜やきぶね詣の人に逢

、

埜東

さくら散麓の闇ぞ恨なる

、

梨邑

儒者寒く友なき山家桜哉

、

玻井

呼子鳥花には寝ぬか夜の声

、
錦川

玉史

我はな見人の花見の疲かな

、

麦秀

島山や波の間より花見ゆる

、

陳兆

さくら咲遠山松の曇かな

輪島

柳眉

旅なれや我も花見のかり衣

道下

誕舟

山かげや我に情の遅ざくら

寺口

徂英

花にうかれ暮行鐘の声長し

、

奇哉

日の入りや磯輪につづく桜人

、

良和

はつ桜人等閑に一卜日済

、富木

蚊几

外途のほのかに明て山桜

、

桂史

入相に霞のわたる桜かな

、僧

梅枝

日のめ見ぬ人の騒ぎや花の山

、

吐木

杉菜野の駒引もどすさくら哉

、

柳水

雲おひて見ゆる遠山桜哉

、

邦明

提灯の貯もあり花の山

、

二快

ちる花に朝声寒し鉦

、道下

青泥

しら雲の我宿近し夕桜

、田鶴浜

文路

けふははや少し散けり初桜

、川尻

遅逸

雨晴てすゝむや花に鳥の声

、川田

佳睡

大寺も桜の中や鐘の声

、羽坂

文士

自声の坊主見へけり花の山

、タケベ

五雲

初霞たな引ひまの花もがな

越中放生津

二翼

花の果見ずに置しか我命

、福野八十八歳

列戸

黄鳥も啼止むを知れ花散日

、

如台

花に居すごし月をもみてん春の山

、

三秀

花に迷ふ鳥がしらぬ三日の月

、

不存

散花に実現なや袖の月

、

蓮波

灯のしらける花見もどり哉

、

杜川

はなざかり松に暮ぬる山家哉

、芝僧

魯雲

花の座や乾く間もなき硯水

、高岡

壺仙

桜狩とてもやどらむ花の陰

、泊

士沈

皆花の月の後光にひらく哉

、

百尔

花匂ふ薄紅の小袖哉

、多胡

漁龍

花の陰にけふしも床し売茶翁

、川崎

桃岳

しのばしき都の跡や山ざくら

南越

溪風

夜のはな我より先に小提灯

、氷見

馬十

いぶかしや桜の奥に鶏の声

上毛厩橋

枕岱

就あみに花散かゝる夕哉

、

土龍

はかなさは人の上なり花ざかり

、女

かな

野社や桜こと木の中に咲

、

丁峨

先けふはどちらの山の桜見ん

、

輪賀

あけぼのや花の上なる薄曇

、

素大

道なくも桜たづねん山ふかみ

、

麦明

夕月に庭掃花の主かな

、

亭祖

思ひ切て参らす庭の桜哉

、

一尺

山越て山見ぬ人やさくら狩

、

黄口

花咲てまう大切の日和哉

、

素陰

山の戸や桜に明て人の声

、

鶯川

良ありて猶珍らしや遅ざくら

、

素栄

鳥立てさくら一枝散にけり

、

素閑

へつらはぬ音に思ひ有花の琵琶

、

土卵

余処に打斧に桜の散にけり

、

麦四

わりなしと思ふや花のとまり鳥

、

米砂

人の情とぶさの中の花ざくら

、宮崎

朔宇

花にたらぬ日をこそ競へ桜人

、

以貫

花と雲の間行春の夕鳥

、

富春

桃さけば桜は寺に咲にけり

、一ノ宮

羽黄

里近し花に琴聞風の暮

、

戯月

花に起花にくれつゝ朧月

、

尺竜

鳥取が身かくれ桜さきにけり

、下仁田

竹輔

よきほどに松の青みや山桜

、安中

夢中斎

身に瘤のありとは見へぬ桜哉

、

求我

鉄砲の音心なし山ざくら

、中宿

佐保

寺寒し浅黄桜に日のかすり
、松井田 松和

山ざくらある夜川越す人は誰そ
、境町 専車

分入れば曇らぬ顔や山桜
、富岡 有隣

花の林ひろきが中の斧の音
、島村 万戸

花の陰鐘もひゞかぬ天気哉
、一ノ宮 沙明

思ひ居れば暫し溜りぬ花ふゞき
、 亜十

朝やけをうしろに花の嵐哉
、下仁田 暁鳥

夕がてをうつろふ花の小雨哉
、沢女 沢鷺

湖にかけ桜は花の上にあちる
、亀丘 笑魚

瓶に酒さくらの宿と答けり
、尾島
官橋

人のあと夜の桜の静まらず
、太田
掌石

足袋ぬいで見上る花の麓哉
、本宿
語山

あけぼのゝ囀は花に寝た鳥か
、
兔豪

朝ひとり見直しに行桜哉
、
龍山

十ばかり家見る里のさくら哉
下毛助戸
贅

散花に鳥また去らず薄月夜
、
嗽石

白妙や桜にうづむ古寺の春
、
莞尔

流汲ばさくらや匂ふ芳野川

、

魚有

日闌るや花の中なる鳥の声

、

車丘

水はやし一棹とめん岸の花

、足利

和井

思ひ入山ざくら戸に匂かな

、栃木

尺樹

初桜弁当もなく見る日哉

、

燈居

行／＼て思はず深山ざくら哉

、

蟠楓

夕栄やいつより山のうす桜

、

暁雨

日下りの鐘恨しや夕桜

、

淡交

何処となう山ひとつぎ桜哉

奥州仙台 露仙

吹嵐花や山田のさゝら浪

、津軽 吳江

雪とまで人なぐさめつ花の果

、 五英

在明にうかれ烏や花の上

、八戸 家文

日頃より謔なりぬ花の衆徒

、 瓢馬

欄干に遠山桜惜みけり

、 文翠

ちる花やさすがに暮の嵐山

、 蝶賀

ちればこそ瞼にかゝれ夜の花

、 仏平

寝て起て錢なき花の袂哉

、 乙因

いつもよし酔ざめの水山桜

羽州秋田

幽尊

塵うちはらふ春の膝寒

文雄

日とともに鶯の声和らぎて

交鴉

月ぞ残れる旅の菅笠

梅塙

舟たてし迹が臥たる荻すゝき

雄

軒に露置数の貝売

執筆

ことの葉の物になれつる人訪て

塙

風折烏帽子恋にや有らむ

尊

祈して神の板間に終宵

豆腐をとりし雪の棧

血に染みし衣をそこらに引散し

小櫛に撫る髭の毛艶

花結ぶ蓮の朝かげ露光る

禅坊しんとほととぎす啼

夢の世に乳のなき事を歎つゝ

野老の下を焚たつる也

花満て月薫る共うたがはれ

鴉

雄

尊

塙

雄

鴉

塙

尊

鴉

襟の鞆鼓の春に静けき

筆

風遠く薫る桜や檜笠

秋田

交鴉

花の山日中の月を見付たり

、

梅塙

馬牽て花の上行山路哉

、

湖山

静なるは花の誠ぞ雨の暮

、

器水

佐保姫のあやとる庭や糸桜

、

女

楓色

花に捨し身は野にも暮山に暮

文雄

見し人の思ひ掃せん花の散

左沢

素風

花の雲心競はず水の末

露橘

人なきは人のとがなり山の花

武州本庄

双鳥

守宮すくはん水の陽炎

李明

帰る雁帰らぬ鳥は妻乞て

素溪

老時もりの家いそぎする

鳥

鉄気ぬく軒端の鍋に月かゝり

明

なかば実になる薺の蔓

溪

小大工の笠着て帰る瀬田の露

鳥

うなめの吼る隣淋しき

月次の百万遍も打忘れ

枕にかけん常夏の水

逢坂は松をいのりの種にして

曲尺譲べき子を育たり

かりて行秋の哀の革具足

とつぷり暮て雁の鳴海

手に付し鯛の鱗の月にみへ

不動参に袷羽織て

明 溪 烏 明 溪 烏 明 溪 烏

後朝の桜寒しと申候

明

しのびの小川山吹の壓

溪

根あがりや鳥さし転ぶ山桜

本庄

双鳥

日のさすや老木桜の花散て

、

素溪

花に寝る鳥あらば花の主哉

、

李明

はやく夜の明るも花の光哉

、秩父吉田丁

周貯

かゝはゆき花白妙に照日哉

、

如圭

散花にしづ心なき下部哉

、

勉遊

まはり／＼もとの桜を詠けり	、	旧路
ひとつづゝ我は老けり花の山	、	二水
咲花に散るや一木の裏表	、	秀哉
雨の夢獮に食せん花盛	、	芦汐
斧の音のこだまに高し山桜	、	曳尾
花に雨名残の風も思ひなり	、	文路
宮雀ふし木桜の巢にぞ鳴	、	野上町
折かけてゆりやむ花に雨の人	、	雪鴻
夜の花匂ひふかきを貰けり	、	冬鳥

今ははや空もひとつに花の色

、三峰山

歌永

嘶すこと尽て諷ふや桜狩

、

洗耳

狩つくしけふは常陰の花に入

、

楚雲

寺ひけて老木の桜名を得たり

、

可南

家土産や深山ざくらの猿苧紮

、勅使河原

快馬

高足の花をぬけたり二日月

、黛村

路要

辻占の札かけ桜さきにけり

、金久保

花叶

なつかしの老や桜にこまかへる

、

民友

去ながら月夜桜と暮にけり

、

五龍

米貰ふ孝女も見たり山桜

、

尔来

酒やめて花にも心やすき哉

、

梭鳥

まこと似し雪よ花散る草の庵

江戸

三千彦

初ざくら感神院の南より

、

春蟻

旅の花心のひもの解そめぬ

、

左鶴

散はづの花は朝から散にけり

、

長翠

初桜桑待里に咲にけり

江戸

貞松

旅の放下の霞過行

菊明

飯蛸に酔のきく暮を肌ぬぎて

瓜坊

襖たゝかば下りよ鶏

五芳

乗鞍に月の四方手を結び添

雲和

たばこの殻の稻妻や待

松

酒の粕乞食に呉る秋更て

明

隣の美人髪をろしけり

坊

琴売に双ヶ岡を二度通り

芳

水鶏の昼を雨の乏しき

和

物書た竹の皮飛ぶひとあらし

松

仏をうつす鐘の聞ゆる

月くらき末の磯に船着て

墓目の絃を何に取られし

色青き玄蕃が弟二十過

風なき背戸にはこべ焼らん

鶯の柳にも来ず花に居ず

世は陽炎の恋はくせもの

隠家や命の上に初ざくら

明

坊

芳

和

松

明

坊

房州

瓜坊

花の陰同じ世にだに小鳥さし

、

可茹

遠里の思ひもふかし遅桜

、

菊二

見果さで散や暮るや桜人

、

宇剋

夕月や桜に塔の影法師

、平磯

宗拱

花の雨しみ込岩の匂ひ哉

、川戸

松隣

三芳野や歩行寄間も花の陰

豆州八幡野

買山

はなは花人にひとしき人もがな

相州猿ヶ島

丈水

居ながらに梢詠ん花供養

、三増

白河

近よれば音せで月に散桜

甲州下山

幸久

忍ぶ夜やあだな桜の顔に散

、

田鶏

酔顔のはぐかりもなき桜かな

、

直樹

酒つきて桜しらせし月夜哉

、

文夔

中／＼に余情ふくめり遅桜

、

裏山

日つもりや見尽しがたき雨の花

、台ヶ原

台眠独

女子衆は花見にやりて庭桜

越後十日町

桃路

朝和や露吸ふ蝶の花誘ふ

、荒井

如蘭

行春も此さくらにはとゞむべき

飛州高山

千足

花に蝶桜に人の夕哉

遠州浜松

白絡

あけぼのゝ月照かへす桜哉

駿州

石蘭

散花にふところ明る上戸哉

信州塩名田

柯則

酔臥は誰やらん花の蹊かな

、

文耕

花の色今もむかしの小町寺

、

胡園

母へ持ぬ桜に罪のあらばあれ

、

洋水

花の香に獶獮よる月の汀哉

、

元夢

日に殖る桜がもとの出茶や哉

、

桃思

咲花に常灯くもる靈屋哉

、

志考

花に雲心にくゝも寝てけり

、

一正

する墨に花の散込はにふ哉

、佐久桜井

心酔

唾の子のたゞ指して初桜

、

如仙

朝露の吹きさへうきに散桜

、野沢

也是

あるが中に花見の欲や遠眼鏡

、片倉

仙丈

散浮し桜汲込釣瓶かな

、佐久桜井

野秀

雨晴や花の雫のうす青き

、

盛風

ぬしや誰花ちる中の繫馬

、佐久

文涛

花に花の影うく水の淀み哉

、

家副

深山たどる葉も花の下枝かな

、

畸給

花の露月の静を思ひけり

、発地

季広

我が朝の桜にわたる孔雀哉

、飯田

蘭二

溪ふかし桜につたふ雲の末

、

知足

一とせに我おとろへつ花の主

、

以三

酔て猶まことの雲ぞ山桜

、

寄三

堀の外や法の車に花の塵

、

巴流

城深し桜に虹のたち渡り

、

梅好

さく花の下も曇や酒の間

、

羽静

夕月やさくらが上の雲兀る

、飯田

蕉雨

花守の鳥放つなり朝ぼらけ

、

壺伯

おもへとや花降かゝる駕の夢

、長瀬

可笑

流れ来る花の深山を思ふ哉

、

自峰

面白の春のかたみや遅桜

、

有声

日ざかりや花散鳩の風白し

、

春水

晚鐘をうらむ桜の日和哉

、

草戸

ひとつらに咲ぬも風情山ざくら

、

三省

花見衆や翁が庵の囃ひ水

、

庭山

一しきり人なし花の村つゞき

、善光寺

猿左

松明ふりて夜川越すあり雨の花

、

五什

散さくら此碑と共に埋れん

、

柳荘

野や花や家を出るにしくはなし

、

希言

山ざくら人なき奥に散終る

、

文兆

此ごろや桜が中の花好み

勢州白子

無曲

東のまに千もと咲たつ桜哉

、神都

太蕘

山川や花に染つく洗ひ衣

津野田

尚道

都辺や花たゝみ込舞の袖

、

遥江

醒て見ん霞の帯や花の山

、

知多

被めす御室の桜裾に散

、津

吾友

雛だなや花散かゝる造り花

、

梅二房

下臥や桜に星の唐にしき

、

瓦六

初桜袴のひだもくづれけり

、津部多 万化

酔さめて寝てさへ花が眼にみゆる

、一身田 司朗

浮雲の桜のせ行日和哉

、石薬師 甘器

一樹／＼我魂うつす桜かな

、山田 晴山

若ものゝ腰もたゆみて花の山

尾州城南 梅司

春なれや名のしれぬ木にも花咲ぬ

三州赤坂 像堂

三月の夢さへ花に動きけり

和泉 和楽

花曇晴て桜に入にけり

河州長尾 路平

摺くぼむ硯へ散るや児桜

、楠葉

一笑

しかれども其道／＼ぞ遅桜

、

一翁

朝ざくら鳥もまだ来ず静也

、招提村

雪江

月はいさ実あけぼのゝ花の雪

河西

李山

夜をこめて鳴かも花に鶴の声

和州南部

麦丈

四五日は丹波太郎や山桜

浪花

泊帆

見尽ぬ花にひまなき心かな

、

支岳

此供養曇らぬ花の日和哉

、

青鯉

花咲てかりに安置す弥陀如来

摂州伊丹

老橋井

有明のあるかなきかの桜哉

泉州堺

弓六

人去て暮る間しばし花見哉

、

五立

年まして風や薫りぬはな桜

紀州高野山

桂山

島の花人なつかしき風情哉

、

枕石

面白や朧さだまる花の月

淡州

黛葉

花に寝て夢は胡蝶と成にけり

播州小野

君中

うきも猶空に晴行桜かな

、

沾節

ちればこそとはいふものゝはつ桜

若州能登野

鬼雀

我物にしては短し花の馬場

若州

黄台

花に来て手よりも口の長き哉

丹波梶原

洞々

しのばしき桜がもとの烏帽子哉

丹後宮津

白兎

ふぐきとも頓て成べし花曇

、下岡村

桃溪

散さぬを手がらに花の姿哉

、網野

壺春

一枝は花見て帰るしるし哉

、

福水

うすぐれて花を見越の流かな

但州生野

文眠

さくら人夕日に騒ぐ御室哉

、義風改

白窟

散かゝる桜に水の訝かな

備前岡山子坤改

幽雅

夕ぐれや花に埋る我からだ

備中倉敷

江曲

しら雲の峰を離てさくら哉

、

玉井

神籬や千歳にあまる八重桜

、

朱頂

けふに翁四方の花見る日成けり

、

芥舟

雨となる雲上る山の遅桜

、

寄人

仙家尋ていざ／＼花の雲に入らん

、

無涯

名にしあふ此山の花も散がてにして

三芳野や月雪もまだ見へ隠れ

、笠岡

斗外

さくら持し筏の上のわらべ哉

備後福山

李朝

出ぎらひの人にも逢や花の山

、府中

水芽

不掃除もよし散がての花薙

、

柳芽

けぶり直き花の麓の夕哉

、

明々

長閑さや老も童も花の客

、上下

蝙蝠

汲ほさん此さかづきの花曇

、布野

魚一

場所に似ぬ発句も出たり山桜

、作木

桃之

東雲やしらむ桜に鳥鳴

、

楚雲

花ざかり千々物思ふ人あらん

、田房

古声

遠山の花のあけぼの寢覚哉

石州大森

臥山

大宮やけだかく暮てさくら花

、郷津

呂櫓

つれなくも日の入がたや散桜

、因原

志山

さくら咲日裏の桜風もなし

作州倉敷

井角

花に月たゞならぬ春の夕哉

、

孤鴻

雨もよひ今宵ぞ月の薄桜

、

其竣

夜ざくらや手折れば鳥の一羽飛

、

富雪

花の庭いとはづかしや旅草履

芸州竹原 女 舌向

花むしろ我も胡蝶とならばやな

防州山口 湖流

花守の箒持せし巖哉

、香川 宇考

何やらん桜を過て手折人

、上ノ関 為充

頃日の山幽なりはつざくら

伊与西條 冬江

大かたは寝ぬ夜ぞ多き花の頃

、 湖梅

神ありといふしるしにや森の花

、 此涛

すはけふも褥に照るや峰の花

、 得雨

子の裾に置物重し小夜桜

、

楓梁

花守を酔せて手折月夜哉

、

鬼洞

誰が情薪にもなして山桜

、

其光

杉一本至て高し花の雲

、

富彦

吹晴て浅黄ざくらの夜明哉

、

千鬣

花の雪朧／＼の日脚哉

、

梅里

虻蜂の人をもさゝず花の奥

、

斗英

今刺の油加減もゆふ桜

、道前

魯川

わるい事是迄きかぬ桜かな

、

八龍

深をして顔あり山ざくら

、桃洞改

楓国

花守の耳肥しけり宵の雨

、今治

卯十

花の雲唐へ行べき日和哉

、

車南

宵の雨皆花にして朝ざくら

、

卷玉

日の筋の桜まばゆき山路哉

安州城北

耕夫

空を行人の心や花ざかり

讃州引田

如竹

花咲かぬ末に嵐せよ夕ざくら

筑前直方

君花

ある中に此一谷や遅ざくら

、

五雪

散はなや潮たき行厳島

、

櫓月

ためしあらばいざや願はん花三十日

、勝野

曙川

散てまた花を庭に寝てもみん

、赤間

郭之

宇都の山植たるも有桜かな

、直方

此原

吹上る花や門出る人の声

、

桃雫

花もどり何やら寒き川辺哉

、

寄木

ある人に折花みせて誘けり

、

元二

瀧の後一重桜のしろき哉

、甘木

坂来

皆おなじ夢や桜の影法師

、

布館

花に向て思ひよこしまなき日哉

、直方

杏華

椎柴に散交りけり禰宜が花

、

白移

手一合食ふ共奥の花をがな

、

秋篁

誰なるぞ花の後のたゝきがね

、

樗舟

野はなべて青が中を桜哉

、

古木

花ざかり隣れる松も曇哉

、

梢

老にけり花の三世も涙なる

、

ひさ

傾城も花にはけふの誠かな

、

湍水

咲く花にかしこくもみゆ寺男子、可角

海向ば海にも花の曇哉、若宮石睡

花守は人の花見る天気かな、蘭溪

船はやし底行花の雲追へる、文鯉

名を惜む人や花にもおとなしき、可十

母親に訴訟は花のをどり哉、文之

此神も花の導守るべし、風壺

さざれ行水の片瀬や花筏、南枝

花の色地より日のぼる金ケ子原、朝三

盗れし枝はちいさし夕桜

、

宇策

日に埋む谷山桜見て過ぬ

、

白志

山ざくら我より先の車跡

、

蝶夫

花の暮車大路や人の風

、

蕪雪

夜ざくらに刀預けて笑けり

、

希玉

花の月烏うつゝの空音哉

、飯塚

舍丁

夕ざくらほの／＼見へて石燈籠

、

士澤

花の瀧濁れるものゝなかりけり

肥前諫早

孤石

花に行道たしかなり鞍馬山

、

雨夕

此春は我身となりて花見哉

、

雪土

海原や花を離て雲の影

、

五笠

遠近の花にたゞみの住居哉

、

芳笠

鳥居ふたつ潜るもしらず初桜

、

梅路

裏道も不束ならぬ桜かな

、

輝白

山村や兎手柏に散さくら

、

文塘

千金の宝つたなし山桜

、

紅良

人多き中に人あり雨の花

、神代

春喬

何鳥ぞ夜／＼宿るさくら哉

、佐賀

如柳

桜散て着心しまるはだへ哉

、大村

無轍

花の山果やひがしに昼の月

豊前椎田

有隣

散さくら鱗交て見へにけり

、田川

蘭丈

梟やさくら月夜の麓寺

雲水

萬井

花に手のとゞかですぢりもちり哉

日州美々津

吟竜

守神や城の奥なる桜馬場

肥後熊本

飲露

花深し廻る日晴の気色そふ

、

亀令

筑島や江を一杯に散桜

対馬

孚湫

散花やものにひかるゝ身の哀

、

何言

たまに来て一夜に花の嵐山

薩州

関叟

夕山や花に心の入に入ル

八幡

斗流

細川や花に水うつ裸ぼう

、

古律

時しなく百花ちらふ裏の園

城南

魯長

遅ざくらをそきも末の春辺哉

、

鬼荊

夜はものゝ暁いそげ花に鳥

寺田

雲裡

舞出るや諷ふ此身に散桜

城南中村

六山

川音を隔て花の曇哉

伏見向島 寛水

散らせしとわびつゝ花を捧けり

醍醐 百哺

城南木水連

遠山やさくらの上の薄煙

天神森 五牛

蝶さしまねく玉の檻

、 平水

客送る笛靈に籟連て

大住 助月

雨の近づく風催ふなり

天神森 雨林

ありやなき月の行ゑの明しらみ

大住 子鬯

ひらく芙蓉の色浅くみゆ

飯岡 戸口

イめる籬のあれて肌寒き

のこること葉をくり返しつゝ

長池

花月

水

染やらぬ名の流れ行湊川

所／＼に牛市の札

月

林

紅粉売の門忍ばしく呼去て

あつしと涙隠す夕月

水

神風のつもれる塵を払へかし

谷千丈に杉聳たり

牛

掘出せし太刀の主のしたはしく

月

時行病をうけぬ離家

林

見残せる花の噂に春もやゝ

口

遅くも暮て鳥の鳴山

花

遅参

雷鳴て桜ひらけし岩間哉

上毛草津

鷺白

雉子の声を打返す波

魚柵

春深く小さき蔵の素建して

菅菰

竹の笥を埋ける也

涼眉

落鮎を籠に提行朝の月

柵

すまふ力に乗つぶす馬

脇ざしの小柄とばしる草の露

紙戸へしのお影な移しそ

墨色に引さき文をなつかしみ

起れる雲を詠め返しつ

旅人は駕立て置三島前

鶏に餌蒔て糲の押売

一嵐浅茅にわたる昼の月

秋の哀を白骨の文

白 菰 柵 白 眉 柵 菰 眉 白

胸の霧壮きはわかく打曇

眉

小島隠るゝあら波の末

菰

花の日の暮なんととして照返り

白

今朝をきのふに忘たる春

筆

蜂あれて屯かへたりさくら人

、草津

鷺白

暮てやゝ月に成迄桜見し

、

夜雪

花守が日和乞せし朝哉

、

涼眉

接木せし塩釜桜咲にけり

、

魚柵

桜盛山居の叟詩はなきか

菅菰

散はなやそこにも小家二三軒

江州土山

素秋

花一木昔を忍ぶ軒端哉

、

月窓

土佐駒のはな／＼しさよ桜がり

江戸

風化

冠捨て入にし跡や山ざくら

鳳声

遠山や花と見るより道急グ

一茶坊

散る時を思へば花の桜哉

、

紗言

みの虫や花の梢にふらこゝす

備三原

梨陰

花十日闇にかゝらで散にけり

土芝

花に風音なくてさへいをねぬ夜

何笠

師の旧庵にて

朝ざくら水汲ことを覚たり

江戸

五芳

五六町隔りて又花の声

百池

ならび立つ桃よ桜よ像の前

嵐月

散れ桜大坂ものゝ首筋へ

土卵

桜狩鷓鴣の雛はく山路哉

蛇蟄

八重一重花相応の日数哉

応美

木のもとの路は曇らず花の雨

平吞

花とのみ我は覺て桜かな

子言

買て見る花と桜や伊勢が家

杞柳

散さくら丘行人の影うすき

桃李

年／＼に顔近付や家ざくら

二雷

隠なき花の梢や夜の空

壺山

さくら狩道なき暮を惜けり

芦翁

侘しさも花に興あり荷茶屋

寒蓼

啼雉子に花降かゝる岩根哉

杜桂

風雨もうつくしき花の弥生哉

一峰

宮殿のくらきをぬけて花見哉

あふひ

夕波に磯山ざくらみだれけり

定雅

まじろがぬ暁に散や千々の花

月峰

月に戻る花の林の独法師

閑徒美

又類さくらに月の表かな

光暁

花の色の静に見ゆる盛哉

在貫

ひとり散る花の木陰の月夜哉

晨龍

いづちゆく人ぞ花散磯づたひ

一二三

さぞ桜鐘に惜まん長樂寺

尼 俚尤

夕月やさくら流るゝ瀧長し

、 得終

花にあそぶ日は惜まねど暮にけり

不狃

米洗ふ谷ひかへたり花の山

古塘

曙の花に酒ふくや濃むらさき

紫暁

新発意の今年も出来つ花の寺

都雀

行／＼て檜原となりぬ花の山

志諺

行ほどの処が花の都かな

渡牛

月静さくら静に暮久し

木貞

花の山風情あまりてなやましき

江蓼

さくら咲路縦横の野原哉

兔毫

殊更に墨染さくら雨の降

凡二

絵馬堂や花にそむける童達

芦雪

袴着て何のついでぞ花の影

芝山

朝戸出や桜見る日の握飯

杏露

此十日心投うつさくら哉

淋沙

鳶の輪や曇はなるゝ夕桜

燕淵

年／＼やまだ見定めぬ花の色

泰溪

あれかしの花盗人はなき世哉

月居

散花に眉の動きし座禅哉

斗雪

灯ともせば花はあかるし春の雨

以外

神籬や花に手あらひ口そゞぎ

羅外

名ざくらの香や転び寝の枕吹

驢丹

花もどりけふもゆるさぬ乞食哉

漢水

花に鳥人のみならず行通ふ

松蒼

花曇くもりもはてず峰の塔

蒼山

酒くさき人群来たり夕桜

車莫

花に駒大名衆の乗人哉

芦人

咲満て此日を曇れ花供養

其成

山里や花の驕に酔菑蕪

白黛

さくら戸や誰が長居のぬり枕

沙長

雨そぼ／＼桜に今朝の出ぞこなひ

南栄

隅／＼や灯とゞく庭ざくら

きせ女

さくら咲ふせやの主硯ほる

渭川

西山やうしろは暮て散桜

米駒

もろこしの花は画に見て庭桜

魚泡

かさに傘ならべて雨の花見哉

楚六

耳にのみふれて桜に暇なみ

るせ女

花の散のみか塵かは御成門

長道

雲とみる心も花の芳野哉

芦涯

けふもまたもとの身にして桜散

闌更

追加

踏んばりし二王を過て花見哉

浪花

江涯

花に酔て心を冷す杉間哉

秀里

春這て見るやさくらの机先

加州

朶山

春の心花ちる夜よりからびたり

丈左坊

天草島牛深興行

心こそ通へ都の花千里

萬井

築紫の波も静なる春

化石

凧あれ見よ児等窓明て

和水

馬上にすくむ布衣の供風流

金波

傾かぬ月を主の手洗水

雪馬

露はら／＼と小笹むら竹

漱石

手枕は我がいとまなり山桜

肥前天草

雪馬

天も花になれりや浮ぶ雲白し

、

化石

何してぞ僕まだみへぬ山桜

、

和水

花にさはる程はなたてそ茶の煙

、

金波

棧や雲の上行花の人

、

漱石

花に行小船に風の吹けふくな

、

了砂

花に酔人の眠りや山の隈

、

雲波

踏分る荊が道や山ざくら

、

青峨

朧気や花に明行峰の里

、

肚牛

ちる花や蝶も交て面白し

古人

蘇遊

葉して入事なかれ山桜

江州粟津

斑鳩

散尽す花に瀬音の絶し哉

豊前小倉

夏夕

酔ざめや花吸ふ鳥も憎からず

信州

忍阿坊

人はらふ築地の陰や花ふぶき

嵯峨

露口

木曾川の朝も寒し花筏

伏見

金兔

さくら木の雨より茂る花供養

、

芦丸

花の雲夕日かゝりてあはれ也

淡海

柏由

酔ざめやさくら散来る岩枕

石州佐和

眠人

をと白し花の雲間の落瀧津

大坂

如障

年／＼にまた新しき桜哉

、

蕪城

折そへし桜散する黒木売

長州萩

菱可

妓王寺にて

咲つ散つ花の行ゑや鉦の声

嵯峨

峨乙

ひよ／＼と鳥幽なり山ざくら

羽州能代

紙秋

日のさすや花の間の大はしご

伏見

磯水

持かゆる杖や左近の花の陰

河州津田

杜撰

折／＼て帰る人なまめかし山桜

甲州藤田

漢甫

一たびは散て又さく花もがな

、

作良

ちりしほや桜声ある松の上

、西南湖

樗冠

夕ざくらはぐれ芸者の吹れ居ル

、浅原

真洞

留主しばし桜咲日にもどる哉

、

南丸

はつ花に人来べきかも下り蛛

藤田

鏡平

吹閉し雲花に散朝日哉

東南湖

政尼

巔や花の上行影法師

、山之神

鳥語

山ふかし鷺の羽風に散桜

、

佰洞

歳々の花に百里の歩み哉

、市川

唐笑

風流士に宿かせ花の東山

、山寺釈

無名

花の夕あかねさす顔吹れけり

、

和石

おもしろや花を隔て君と我

、

李冠

月夜よし花の木陰を廻る哉

、百々

令雨

午時中や花に居眠る桜人

、平岡

如雪

山陰や日も悠然と遅桜

飯野

真都良

遠山や過來し花に日の落る

、

静良

花に来て無筆悲む女あり

、小笠原

都良雄

風あらしき二月過て山ざくら

、

静管

花守や夜はわたくしの小盃

、藤田

可都里

花最中花見ぬ人の無分別

肥前諫早

榎江

ねよげなる苔の莖や花の下

、

停華

煙太し桜が谷のひとつ家

、

榎枝

ひと日／＼来て主する桜かな

、

昏芦

子を余多持て花見る奢哉

、

桃扇

窓さきやほのかに夜の桜散

、

澧波

春の日の嵐は花のうき世哉

甲州一町田中

方舟

高盛に花吹かゝれ芳野椀

江草津

可能

心のこる花のもどりや暮の鐘

上毛草津

梅枝

世の花は散て今社奥之院

、

泉魚

眠がりの朝起うれし花の春

作州弓削

白亀

花の雲たな引かたやひがし山

イセ

恕道

惜からぬ命を花に惜みけり
、
湖幽

鐘つきの天窓の上やちる桜
越後井之岡
清泉

夜を込て桜にしらむ高根哉
信州飯田
菊麿

車井に散やさくらの朝ぼらけ
勢州上田
眠山

山の井は浅し桜に夕附日
芸州廿日市
得雨

こもりくや花に沈める鐘の聲
浪花
芦村

山里や花の木陰に臼の音
、
美山

大仏に桜散込箭声哉
、
画涼

見上れば誰か見おろす山桜	防州大海	羽琴
山頂や汗かいたなぐるさくら人	、旦	霞尤
花に鳴鳥何／＼ぞ朝附日	、室津	鯨牙
夕附日花の一重の清きかな	、陶	楓左
雲折／＼桜に影の見ゆる哉	、岐波	春郷
白妙や雨にもくれず桜山	、	和道
岸陰や花踏のぼる雨蛙	、引野	梅暁
花の間やほのかに響く鈴の音	、喜川	錦水
不毛山に花の錦や朝ぼらけ	、	不尤

沓音の御階に近き桜哉

、

志高

炭がまやあれたるまゝに散桜

、小郡

桃林

戯るゝ穴熊黒し山桜

、

秋月

見返れば晚鐘寒き桜かな

、

花卜

誉たらで科と詠けん桜花

李洞

又といふ春覚束なちる桜

、山口 八十翁

無心

里ふかく何某どのゝさくら哉

、

鴻南

曳給ふ裾に静なりちる桜

、

蘭台

風絶てあくまで花の曇けり

、

波光

島陰やあぐる白帆に桜ちる

、

鴉跡

夜の花女官の袖に雫せり

、

天民

夕かげや花かすめ行一羽鶴

能州能登部

麦杜

夢想之吟

うへ一重小松にかけて桜かな

、

李応

峰は雲眼の及ぶ花に日の移り

、

金丸

古寺や花に火ともす庭の春

、

朝々

雲白し花吹とちて日の昇ル

長州赤間関

里山

瀧凄し斧の柄朽る桜哉

、

花休

散花を追行鴛の番ひ哉

、

里山

潜り出て扱は雪吹の花なりき

、

薰里

一日は人どめもあり花の山

長崎

斗醉

大峰や花に振へば明の雪

江州水口

梨風

絶／＼も花に名高し吉野山

、信楽

山鳥

桜咲て松柏木の青き哉

、田川

ノへ

花にめでゝ扇をかざす山路哉

能川田

乃至

苔むして花の稀なる古枝哉

城南

貞雅

雨の花巖の角に散にけり

、

孤隣

花さくや戸さゝぬ庵に高軒

都水

花の雲何地へ杖の曳所

浪速

素柳

こと／＼く動がごとし花の山

勢御園

四山

朝な／＼雲見る山の花重し

、

霰打

花よ月よ人に後れて帰るべし

、白子

帯川

表六句

宮守の花や囃の夜の音

筑芦屋

白志

朧に心しのぼるゝ月

朝三

浪ひたす春の川原に駒留て

、

鳥なまぐさき匂ひ成けり

志

桑の弓納る御代の其中に

、

涼風わたる軒のなよ竹

三

花の月寺は曇りてみへざりき

河内

雪江

梅ならで東夷も歌ふ花の雲

八幡

鯉文

初花や木樵が里もしたはるゝ

、

李風

雨の花桜閑に日暮たり

水城

其友

兵者の一筆のこす桜哉

、

朝炉

又や見ん花の遅速ぞ頼みなる

七十六翁

五雲

夜の花山水赤く人うつる

浪花

八雲

浮雲や花に吹るゝ蛛の糸

加州金沢

兔文

夕照や藻屑が中のさくら貝

、宮之腰

竹之坊

色に香にそゞろ堪ずや花の雲

城南

雲裡

山陰の庵もうき世のさくら哉

金久保

川風

花咲てむかふが岡の朧哉

武州勅使河原

無塵

世の塵を見失ひけり花曇

芸州能美

和扇

花をめづる記

おもへども／＼花ほど世の中にめぐゝ

うるはしく、むがしきものはなかりけり。されば

潘岳は河陽にうゑ、人丸は吉野山にうかれ、

これは／＼と口をつぐみ、咲不言と筆をふるふ。

漢の倭の、貴き賤きかぞへかへすなん

めであへりける。かくしもいひならぶるは

月雪のため後めたしとおもはざるには

あらねど、あら玉の年のひとゝせ十まり

ふた月のうちに、たぐふべき月なき月に、たぐふ
べき花なき花の咲出たるを

あひにあひて、今此君が御代にさゝ竹の大宮人、

ものゝふの八十氏人より始て賤しき

賤山がつ迄も物めでしあへる此御代

なれば、先こそ花はめづべかりけれと

たぐ／＼春はあだし心を我もたず

おもへども／＼

時も時さく花も

花ぞ春の花

勢州

とろゝ庵獲車

宵の雨しほるゝ花のあるじ哉

在浪花 壺外

誰が家か桜も最早散すまし

加州 一川

跋

東山芭蕉堂像前におゐて、

年毎弥生中の二日、弊袍重裳

をゑらばず、まに／＼花を奉り

香を炷て、正風の高徳を

あふぐことは、池子が序に委し

ければ、こゝに記すにあらず。

やつがれも此道にいざといふ人

ありけるより、月に日に志をかさね

けふや連坐の末にありながら

花に覆ふ翁の

しづく身にしめむ

斯つたなき一句をさゝげ、跋に

加ふるものは淡海のかたはらなる

日野の淇竹なりけらし

(跋ウ)

京都三条通寺町西

蕉門書林 菊舎太兵衛

(裏表紙見返し)

(裏表紙)